

# ロンドンのモロッコ人コミュニティ

田 島 康 弘

(1995年10月16日 受理)

## Moroccan Community in London

Yasuhiro TAJIMA

### 第1章 研究目的

本稿は、ロンドンのアラブ人社会の一部を構成するモロッコ人コミュニティについて、筆者が行なったききとりや若干の調査をふまえて、その実態をできるだけ明らかにし、そのかかえる諸問題やこれをとりまく諸状況について考察しようとするものである。

イギリスのマイノリティの諸問題全般については、日本語のものでも石田 (1988)<sup>1)</sup>、安田 (1989)<sup>2)</sup>、富岡 (1985)<sup>3)</sup> など既に一定の蓄積があるが、マイノリティの中でも少数派であるアラブ人については、イギリスでも研究が少なく、ようやく近年注目されはじめている状況にあり、こうした研究状況やアラブコミュニティ全体の概観について、先に筆者は報告したことがある<sup>4)</sup>。

また、アラブ諸地域からのヨーロッパへの移民と言えば、マグレブ3国とりわけアルジェリアからフランスへの移住者が圧倒的に多い<sup>5)</sup> ことが知られており、彼らの実態や諸問題に関する報告もみられる<sup>6), 7), 8)</sup> が、本報告でイギリスのアラブ社会をとりあげているのは、筆者のアラブへの関心と社会地理学の勉強をも兼ねたイギリス留学との接点であったからであり、他に大きな理由があるわけではない。しかし、英連邦移民を主体とするイギリスにおける、非英連邦人であるアラブ人の研究は、それなりの特殊性をもった興味深い研究対象であるとも言えよう。

さて、先の拙稿でも述べたように、イギリスのアラブ人社会といっても多様であるが、その特色の1つは、いわゆる難民が多いことである。しかし、本稿で扱うモロッコ人の場合はこうした一般的な傾向とは異なり、典型的な経済移民と言ってよい部類に属するものである。

筆者がこうした経済移民の特色をもつモロッコ人コミュニティに注目するのは、イギリスのアラブコミュニティの中で1つの典型的な類型をなすものと捉えているからで、これと正反対のもう1つの類型がイラク人コミュニティに見られるような難民としての移民のケースであろう。これら2つの類型に対し、エジプト人コミュニティの場合は、さらに多少異なる特色を持っているように

考えているが、これについては別稿で扱う予定である。

これら以外に、近年はイエーメン人<sup>9)</sup>、ソマリ人<sup>10)</sup>などの報告もなされてきており、アラブ人への関心が高まってきている状況にあると言えよう。

こうした中で、アラブ人自身の側の動きも活発になってきており、アラブ連盟とアラブクラブの共催によるアラブコミュニティの諸問題を議論する会議が開催されるようになってきた。その第1回は1990年、第2回は1993年に開かれており、今後も2年に1回開催することが決められている。

筆者は1993年6月から94年の4月まで、イギリスに滞在する機会を得たが、本稿はこの間に行なった調査を基にしている。調査は決して予期した通りにはすすまず、きわめて不十分な結果におわったが、熱心に協力して下さった方々もおり、また、数は少なくとも事態の一面は反映しているものと考えて、現在の段階で可能な範囲でまとめたものである。

## 第2章 モロッコ人コミュニティの概観

### 1. 従来の研究からみたモロッコ人コミュニティ

#### 1) Ghada Karmi 女史の研究

モロッコ人コミュニティについては、Ghada Karmi 女史が1988年に調査を行なったと本人自身が語っている<sup>11)</sup>が、その調査報告は未だ出版されていない(1994年1月末現在)<sup>12)</sup>。また、その調査の内容自体も、彼女がNational Health Serviceの医師であることの故か、健康・医療問題を中心にした調査だったようで、このことは、彼女自身「アル・ムハージル」<sup>13)</sup>のNo.17で、この調査の内容について、1. 健康、2. 病気、3. 生活への態度の3つを柱とした調査であると述べていることから推測される<sup>14)</sup>。ということは、この調査は移住の過程や移民の諸問題それ自体を中心とした調査ではないということであり、移民研究にとってどの程度有効なものであるか疑わしい面もある。

しかしながら、彼女が3人のフィールドワーカーの協力<sup>15)</sup>の下に、男女約半々の計71名の調査を行なったこと自体は高く評価されねばならないだろう。それは何よりもモロッコ人に対する調査自体が非常に困難だからである。この困難さについて彼女自身が語っている。すなわち、モロッコ人コミュニティの人々は、1) 秘密的であり、2) 非協力的であり、3) 疑心暗鬼的である。それ故、今までいく人かの研究者がモロッコ人コミュニティに足をふみ入れたが、みな途中であきらめたのである。また、「アラブでもあり、ムスリムでもある故、アラブやムスリムの社会について十分な知識をもっている私でさえむずかしかったのであるから、まして、ヨーロッパ人であつたらなおさらである」とも述べている。

何はともあれ、こうした彼女の調査によって、ノースケンジントンのモロッコ人コミュニティに関する、ある程度の基礎的な事実がわかってきたということが注目され、評価されねばならないだ

ろう。

調査の結果わかったこととして彼女自身があげているのは次の5点である。

- (1)モロッコ人は健康であること。
- (2)彼らの最大ののぞみは通訳と女医であり、とくに女医については、むしろ男性の方が自分の妻や娘のために望んでいること。
- (3)これに次ぐ望みはローカル・モスクの存在で、その理由は宗教は健全で健康な生活の基礎だからというものである。
- (4)さらに婦人は Social Club や hammam (public bath=公衆浴場) を望んでいる。これは婦人にとっては、たとえ仕事を持つ婦人であっても外の世界との交流がほとんどなく、孤立しているので、婦人の public life として重要だとしている。
- (5)以上のことは婦人のみでなく男性にも当てはまるということが5点目である。

これらの中でも(4)については、彼女自身が女性であるためかとくに強調している。すなわち、モロッコ人の女性たちは、二重の仕事、つまり1つは家庭内の domestic な仕事、もう1つは彼女らの仕事である家庭外の domestic な仕事<sup>16)</sup> をしており、しかもこれらには援助や支えや同情すらないのであり、従って、彼女ら同士の交流や支えが必要なのであると。

また、調査の結果をふまえて、彼女は1つのアドバイスを打っている。すなわち、多くの者が将来の帰郷に関して態度があいまいであるが、もし、近い将来にはっきりした帰郷の予定を持たないのであれば、イギリス社会への適応を積極的に考えるべきであると。より具体的には、1) 言葉をきちんと習うこと、2) 非モロッコ人の友を持つよう努力すること、3) イギリス社会の諸制度や諸機会を利用、活用することなどにもっと努力すべきだと言うのである。

## 2) その他の研究

以上のべた Ghada の調査は、モロッコ人コミュニティを対象として行なわれたほとんど唯一の調査なので、やや詳しく紹介したが、これ以外にも、アラブコミュニティ全体にふれる記述の中で、モロッコ人コミュニティについてふれたものが2~3みられる。

その1つを紹介すると、例えば Camillia Fawzi El-Solh (1993)<sup>17)</sup> は、モロッコ人コミュニティについて、以下の5つの諸特徴を指摘している。

- (1)モロッコ人は1950~60年代の英連邦諸国からの経済移民と同様に、イギリス労働市場の空隙をうめる形でやって来たこと。
- (2)仕事は、大部分がホテル及び「まかないの仕事」で、NHS (National Health Service) に従事する者も一部みられること。
- (3)技術を持たず、英語力もないので、最低の賃金分野にしかつせず、また、上昇の展望も持ち得ないこと。
- (4)60年代末から70年代初期にかけての移民入国制限の強化の時期に家族の呼び寄せを行なったこと。

(5)従って、それまでの一時的移民であったものが、以後、長期的定住に変化してきていること。

また Camillia は、モロッコ人がかかえる問題について、教育の低さと技術力の低さ、そしてこれらに起因する失業率の高さをあげ、さらに、帰郷の意志を持つ第1世代とイギリスで生まれ社会化した第2世代との間の緊張やあつれきを指摘し、これがムスリムアイデンティティ探究の方向をさし示していると述べている。

## 2. イギリスのモロッコ人協会と筆者のアプローチ

### 1) ロンドンの5つの協会

以上の報告は、専らロンドンのノースケンジントンに集中居住するモロッコ人に関する報告である。たしかに、ノースケンジントンはイギリスでモロッコ人が最も集住している地区であるが、この他にもいくつかの小さな集中居住地区があり、そこには協会など何らかの組織がつくられている。

そこで、モロッコ領事館の情報に依存して、これらの協会 (Voluntary Association) について把えてみると、こうした組織はイギリス全土で7つあり、そのうちの5つがロンドンに存在している。この5つのうちノースケンジントン地区内にある組織は2つだけで、その1つが Moroccan Information and Advice Centre<sup>18)</sup> であり、もう1つが Al-Hassaniya Moroccan Women's Centre<sup>19)</sup> である。両センターとも Golborne Rd に面していて、両者の事務所は互いに100mも離れていない。この両者は Gender の問題をめぐって、考え方の上で若干の対立があるとの指摘がなされている<sup>20)</sup>が、双方に接触した筆者の印象では、相互の交流もあるようで、それほど深刻な対立があるようには思われなかった。

なお、Women's Centre の活動内容をセンターで発行している印刷物に依拠して若干紹介しておく対象はモロッコ人およびアラビア語を話す女性やその家族で、健康と教育の増進を目標としている。より具体的には、活動の中心となるセンターが設置され、婦人や子供のための英語教育、健康教育、通訳サービス、10代の女性を対象とした裁縫やししゅうなどの文化活動等が行なわれているのである。

残りの3つの協会のうちの2つは、ノースケンジントン地区からそれほど遠くないところに事務所を構えている。1つは Westminster Moroccan Widadia で、ノースケンジントン地区のやや北方にあり裏通りに面した入口から階段を下りてゆくと、地下にやや広いカフェがあり、その横の小さな部屋が事務所であった。カフェには、筆者が訪れる夕方にはいつもたくさんのモロッコ人男性がテーブルを囲み、雑談にふけったりカードプレイをしたりしていた。

もう1つは Westminster Moroccan Parents Association で、ノースケンジントンの東方に位置し、地下鉄の Edgware Road 駅の近くに事務所がある。但し、ここは独立した事務所ではなく、会長氏の自宅であった。

ロンドンにあるモロッコ人協会の最後の1つは、Moroccan Workers Association Widadia で、以上の4つがいずれもロンドンインナーシティの西部に位置していたのに対し、インナーシティの

東部、いわゆるイーストエンドに存在する。イーストエンドと言えば、現在はバングラデシュからの移住者が集住する地区として有名であるが、モロッコ人もその一部がここに集住しているのである。学生寮のような建物の2階の一室が、その事務所であった。

## 2) 筆者のアプローチ

筆者は、以上のすべての協会や組織に対し、筆者が作成したアンケートの調査・協力の依頼を行ったが、

(1)最後の2つの組織に対しては、何回か訪問したにもかかわらず、責任者には直接面会することができず、間接的な依頼になってしまったこと。

(2)また、3番目の Westminster Moroccan Widadia のように、責任者に直接面談し、協力の約束にも応じてくれたにもかかわらず、結果が伴わなかったこと。

などのため、調査は思うようには進展せず、結局、ノースケンジントンの2つの組織の代表者などの協力によって、11人の調査結果を得たにとどまった。従って、今回の調査によって得られたことから言えることは、きわめて限られていると言わざるを得ない。

しかしながら、回答を寄せて下さった11人の方々の存在、調査の過程で様々な協力をおしなかつた協会の責任者の方々、「アル・ムハージル」の編集長氏、心よく情報を提供して下さった領事館の方など、様々な方の協力を得ており、また、筆者の調査結果も一定の事実に基づくもので、これをまとめることも意味のあることと考えて、整理することにした次第である。

なお、ロンドン以外では、ロンドンの南方サセックスの Crawley に Moroccan Widadia of Crawley があり、また、スコットランドのエジンバラにも、Moroccan Workers Association Widadia of Scotland が存在するが、これらについては筆者は全く接触していない。また、かつてはロンドン北郊の St. Albans にも St. Albans Moroccan Widadia が存在したようである。

## 第3章 調査結果

筆者は、調査項目を整理したモロッコ人移住者個人に対する調査票を作成し、これを各協会・組織の代表や書記などの責任者の方に10部ずつ程度依頼し、後に回収に当たるという方法をとった。回収し得た調査票は、ほとんどノースケンジントンの2つの組織からのものであり、他の3つの組織からの回収は不可能であった。なお、使用した言語は英語のみで、アラビア語を併記することも考えたが、その必要はないとの被調査者側からのアドバイスも受けたので、アラビア語の併記は行っていない。

以下に、調査の結果を調査票の項目にはぼ沿ってみてゆきたい。調査の内容は大別すると次の5点にわけられる。すなわち、1. 渡英時点のことについて、2. 渡英前のことについて、3. 現在の生活状況、4. 故郷との関係、5. 将来及びイギリス社会について、の5点である<sup>21)</sup>。

## 1. 渡英時点のことについて

## 1) 渡英の目的など

まず、被調査者がいつ渡英したかをみると、'70年代が最も多く、'80年代がこれに続いている(第1表)。とくに男性はほとんどが'70年代に渡英している。

つぎに、来住時における彼等の年齢をみると、10代後半の者が最も多く、これに20代前半を加えるとほとんど全員となる(第2表)。つまり、若い時に来ていることになる。

なお、ここで調査時点における彼等の年齢を付け加えておくと、20代が4名、30代も4名と多くの者が今なお20~30代であることになる(第3表)。

第1表 来住年

来住年	男	女	計
70年代	4	2	6
80年代	1	2	3
90年代		1	1
不明		1	1
計	5	6	11

第2表 来住時の年齢

来住時の年齢	男	女	計
10 ~ 14			0
15 ~ 19	3	3	6
20 ~ 24	1	2	3
25 ~ 29			0
30 ~ 34	1		1
不明		1	1
計	5	6	11

第3表 調査時点での年齢

調査時点での年齢	男	女	計
20 ~ 24	1	1	2
25 ~ 29		2	2
30 ~ 34		1	1
35 ~ 39	2	1	3
40 ~ 44			0
45 ~ 49	1		1
50 ~ 54	1		1
55 ~		1	1
計	5	6	11

以上を全体的にまとめてみると、被調査者の多くは1970~80年代に若くして渡英し、現在20~30歳代になっているとすることができよう。

つぎに、どこから来たのかをみると、フランスの1名を除いて9人がモロッコから直接来ており、このうちの6人は北西部の海岸都市ララッシュから来ていて、ララッシュからの者が多いと一般に言われていることと一致する(第4表)。また、この6人はいずれも'70年代に来ている。

何のために来たかの結果をみると、仕事の他に勉強のためという者も多く、これはとくに女性に多い(第5表)。

また「親と一緒に生活するため」との答もみられたが、これは70年代以降のいわゆる「呼び寄せ」によるものであろう。

第4表 前住地

前住地	男	女	計
モロッコ ララッシュ	4	2	6
カサブランカ	1		1
フェズ		1	1
メクネス		1	1
フランス		1	1
不明		1	1
計	5	6	11

第5表 来住目的

来住目的	男	女	計
仕事	2	1	3
勉強	1	3	4
親と一緒に生活するため	1	2	3
不明	1		1
計	5	6	11

次に、他の国でなくイギリスを選んだ理由をみると、「親がいたから」、「兄弟姉妹がいたから」、すなわち家族が既住していたとの答が多く、既住者の存在の影響が大きいことがわかる（第6表）。ここでは、既住者の方の渡英の理由は不明であるが、被調査者の多くが「呼び寄せ」移住者であることも推測される。

第6表 イギリス来住の理由

イギリス来住の理由	男	女	計
親が既住していたから	1	1	2
親と一緒に来た		2	2
兄弟・姉妹がいた	2		2
英語を学ぶため		2	2
英語が話せたので	1		1
イギリスで仕事が決まったので	1		1
イギリスが好きなので		1	1
計	5	6	11

そこで、被調査者の渡英時点での既住者の内容をみると、両親や兄弟など家族のいた者が半数以上と多かった（第7表）。また、他方では「親と一緒にイギリスに来た」という者も少なくない（第8表）。

第7表 既住者

既住者	男	女	計
両親	2	1	3
兄弟	2	2	4
友人	1	2	3
誰もいなかった		1	1
計	5	6	11

第8表 来住時のつれあい

つれあい	男	女	計
一人	4	1	5
親と一緒に	1	3	4
友人		2	2
計	5	6	11

2) 当初の居住と仕事

まず、はじめてロンドンに来たときの宿をどうしたかをみると、やはり家族に依存するケースが最も多かった（第9表）。また、その居住地はノースケンジントン以西のロンドン西部が最も多く

第9表 最初の宿

最初の宿	男	女	計
家族の家	4	3	7
友人の家	1	1	2
雇用主の家		2	2
計	5	6	11

「中心部」、「北部」に分類したものも含めてすべて、いわゆるインナーシティの部分に相当している（第10表）。また、ほぼ全員がその後居住地を変えている（第11表）。

第10表 来住当初の居住地

居住地	男	女	計
ロンドン西部	3	1	4
〃 中心部		2	2
〃 北部		1	1
オックスフォード		1	1
不明	2	1	3
計	5	6	11

第11表 居住地の変更

居住地の変更	男	女	計
Yes	4	6	10
No	1		1
計	5	6	11

次に、仕事をどのようにしてみつけたかをみると、こちらは家族に依存するものはそれほど多くなく、自分で探すケースが多い（第12表）。当初の仕事の内容は、Cateringと言われる給仕とかま

かないの仕事が最も多く、男ではコック、女ではハウスメイドがこれに続いている(第13表)。まさに、「技術が不要で英語力もさほど必要としない最低賃金の仕事」ということになろう。転職についてみると、職を変えていない者も3割程度いるが、これは安定というよりも他に職がないからと見るべきなのだろうか(第14表)。

第13表 当初の仕事

当初の仕事	男	女	計
コック	2		2
まかない仕事(ホテル, レストラン)	2	2	4
ハウスメイド		2	2
受付		1	1
学生		1	1
不明	1		1
計	5	6	11

### 3) 渡英時の諸問題

来住当初に直面した問題は、第1は言葉であり、ついで社会への対応であった(第15表)。そこで言葉の問題についてさらにみると、入国時における英語能力では

「全くなし」が断然多く、「少し」を加えると大部分を占める(第16表)。また、この英語能力は、とくに男性で弱い傾向がみられる。これは、女性は来住時の年齢が若く、勉学目的で来た者が多いことなどを反映しているからかも知れない。英語能力取得の努力は全員が行なったと答えているが、その形態では、「英語学校へ通った」とする者が最も多かった(第17表)。

第16表 入国時における英語能力

英語能力	男	女	計
全くなし	4	3	7
少し		2	2
中程度	1		1
十分ある		1	1
計	5	6	11

第12表 職探しの方法

職探しの方法	男	女	計
自分で探した	1	3	4
来る前に手紙で決定	1	1	2
来てから手紙を書いた		1	1
レストランを訪ねた		1	1
職業斡旋業者を訪ねた	1		1
家族に頼んだ	2		2
友人に頼んだ	1		1
学生		1	1
不明		2	2
計	5	6	11

第14表 仕事の変更の有無

仕事の変更	男	女	計
Yes	3	3	6
No	1	2	3
学生		1	1
不明	1		1
計	5	6	11

第15表 当初の困難

当初の困難	男	女	計
言語	4	5	9
宗教		1	1
社会への適応	5	1	6
その他			0
なし		1	1
計	9	8	17

注) 1人複数回答による。

第17表 英語能力の改善努力

改善の努力	男	女	計
英語学校へ通った	4	5	9
仕事の中で努力	2	1	3
その他(TV, 新聞, 本など)	3	0	3
計	9	6	15

注) 1人複数回答による。



